

単元名 社会生活における役割の自覚と自己責任
東日本大震災と自己との関わりにつなげる指導

県立府中高等学校

- 1 学 年 第1学年, 第2学年
- 2 単元名 社会生活における役割の自覚と自己責任
- 3 本時の目標 東日本大震災からの復興に向けての取組である「緑のバトン運動」に参加することを通して、社会の一員として周囲の人びとと助け合いながら生活していこうとする心情を育てる。
- 4 資料名 ・資料1 (東日本大震災について)
 ・資料2 (「緑のバトン運動」について)
- 5 授業の展開例

	学習活動	主な発問と予想される生徒の反応	留意点
導入 (10分)	1 東日本大震災の資料を読む。 (資料1：黙読)	○H23. 3. 11 を思い出してみよう。 <ul style="list-style-type: none"> ・忘れられない出来事だ。 ・すでに過去のことと思っている。 	静かに黙読させる。
展開 (35分)	2 保健委員より文化祭における「緑のバトン運動」の取組と成果の報告を聞く。(資料2) 3 教師の話の聞き、東日本大震災と自分との関わりを考える。 4 今、自分自身ができることを考える。	○「緑のバトン運動」について理解できましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・文化祭で展示をしていたな。 ・どんな木を育てるのかな。 ○東日本大震災からの復興に向けての取組である「緑のバトン運動」を含め、それぞれが、震災と自分との関わりを考えてみましょう。 <ul style="list-style-type: none"> ・募金活動をしよう。 ・将来、ボランティアに参加しよう。 ◎クラスとしての「緑のバトン運動」参加計画(特に夏休み中)を作成しよう。 <ul style="list-style-type: none"> ・枯らさないように育てたい。 ・暑い夏を越せるようにしたい。 	文化祭での取組を知らない生徒には補足説明を行う。 生徒が主体的に取り組めるよう、夏休み中に「緑のバトン運動」へどういった関わりができるか具体的に考えさせる。
終末 (5分)	5 本時の感想を書く。	○今日の学習を振り返って、感じたこと考えたことをまとめよう。 <ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災が起こってから長い時間がたっている。今回の授業で、忘れてはならない出来事だと痛感した。 ・時間の経過とともに、忘れてしまうことがあるが、多くの尊い命が失われた事実とともに、自分たちにできることをやっていきたい。 	本日の学習を振り返る。

1 地域や生徒の実態

本校の多くの生徒は、府中高校生であることに誇りを持って学校生活を送っている。基本的な生活習慣が確立されていて、挨拶もよくできる生徒達である。しかし、自ら考え行動する力や事象に対し論理的に考える力が不足している傾向にある。そのことが、今後の学力のさらなる向上にむけた課題ともとらえている。

また、本校生徒の通学範囲は広く、地域との関わりが少ないことが課題である。地域清掃等を通して生徒と学校近辺の地域との関わりを深める取組は行っているが、生徒自身の居住地における地域との繋がり、高校進学後から希薄になる傾向にある。そのため、自己と社会との関わりをとおして郷土を愛する心の育成を目指す取組が必要である。

2 教材開発及び指導過程の工夫

昨年度実施した大運動会における「集団行動」の演技を通して、愛校心を持つ生徒の割合が83.5%から94.1%になり、道徳教育の取組の成果が現れたと考えている。しかしながら、前述の通り生徒意識調査において地域に関心を持つ生徒や地域との関わりを持つ生徒の割合が比較的低い実態が明らかになった。昨年度の取組を継続発展させていくとともに、自己と社会との関わりをとおして郷土を愛する心の育成を目指したいと考え、今年度は東日本大震災後の復興と自己の関わりをテーマとした実践を行うこととした。震災から2年が過ぎ、私たちの意識のなかで震災の記憶が薄らいでいく中、もう一度「3.11」を思い出し、行動していくエネルギーを呼び覚ます取組をしたいと考え、「緑のバトン運動」への参加と、「震災語り部」の方による講演会を取組の中心に据えた。なお、資料1（東日本大震災について）は、「震災語り部」の方より提供していただいたものを活用した。

3 発問の工夫

資料1（東日本大震災について）を黙読するこ

とで、生徒は想像を絶する当時の様子を思い出したり、被災された方々に思いをはせたりすると考えた。その後、「今、自分自身ができることを考えてみよう」という発問を通して、生徒が被災された方々に真摯に向き合う姿勢が生まれるものと考えた。

4 生徒の反応（感想文より抜粋）

- ・体験をしていない私にとって、活字にして話を教えてくださるのはありがたいなと思いました。できることならボランティアをしてみたい。
- ・東日本大震災について改めて考えることができました。今思えば、自分は少しも被災者の方のことを分かっていたいなかったんだと思いました。もっと、人の気持ちが分かる人になりたいと思いました。
- ・東日本大震災が起こってから長い時間がたっています。このような授業があるまで、正直忘れかけていた部分もありました。しかし、今回の資料を読んで、被災された方や親族を亡くされた方にとっては一生心に残る出来事であり、忘れてはならないことだと思いました。

5 成果と課題

(1) 成果

生徒の感想からもうかがえるように、道徳の時間が設けられていない高等学校において、生徒自身が日々の学校生活ではあまり考えることのない事象に思いを寄せることができた。また、実施した教職員にとっても、普段の関わりではふれられない生徒の思いに向き合い、生徒の新たな一面を知ることができる機会となった。

(2) 課題

今回のホームルーム活動を実施するに当たり、事前に中学校での道徳の時間を参考としなかった点を反省している。今後は、連携中学校の授業を参観させてもらう等の連携を深め、高等学校における道徳教育の充実につないでいきたい。

『あなたへ』

ヒグラシがうるさい位に鳴いています
 きょうは8月21日 日曜日
 お盆を過ぎて街は静かになりました
 あなたが突然いなくなって5ヶ月と10日
 もう5ヶ月 まだ5ヶ月ととても複雑です
 あの日忘れようにも忘れられない
 東日本大震災が起きました
 あなたは迎えに行った私と手を取り合った瞬間
 凄まじい勢いで波に吞まれ私の目の前から消えました
 いったい何処へ行ってしまいましたか
 あの時から私の心はコンクリート詰めになり
 山々が新緑に覆われても桜が咲いても
 何も感じる事ができずにおります
 そして息子達も私も語り尽くせぬほどの
 様々の事があって今日に至ります
 突然いなくなったあなたに伝えたい事
 聞いてもらいたい事が山ほどあって
 心の整理もつかないけれど手紙を書くことにしました
 お店のこと心配していますか
 お店はたくさんの方々の応援をいただいて
 4月23日仮店舗をオープンしました
 13坪の土地に3坪のプレハブテントを一張り
 混乱の中で息子達は本当によく頑張りました
 そのお店の真向いには一軒家も借りることができ
 家族五人で暮らしています
 全国の皆さんからはたくさんのご支援をいただいて
 その上素晴らしい方々とも出会うことができました
 又、私が書いたお酒の〈負けねえぞ気仙沼〉の
 ラベルがとても好評で
 多くの方々に買っていただいています
 ある方に「これは旦那様書かせてくれたのよ」と
 言われました
 私もきっとそうだと思っています
 何も言えずに別れてしまったから
 ありがとうと伝えたくて切なくて悲しくて
 どうしようもないけれど
 38年間一緒にいてくれて仲良くしてくれて

ほんとにありがとう
 守ってくれて支えてくれてありがとう
 感謝しています
 これからはあなたが必死で守ってきた
 お店ののれんは私が息子達と守ります
 大丈夫です あなたはきっと何処かで
 私達のこと見守ってくれているのでしょう
 季節の巡りは早く間もなく涼風が
 吹いて秋がやってきます
 願わくは寒くなる前に雪の季節が
 来る前にお帰り下さい
 何としても帰ってきて下さい
 家族みんなで待っています
 私はいつものように お店で待っています
 ただただ ひたすら
 あなたのお帰り待っています

平成23年8月21日

菅原 文子

菅原 豊和様へ

※「恋文大賞」受賞作品。夫遺体は、1年3ヶ月ぶりに
 自宅兼店舗からわずか200mほどの建物の中から発見
 され、家族のもとへ帰ることができた。文子さんは「や
 っと帰ってきてくれた。これからも家族の歴史を刻ん
 でいきます」と話している。

『お世話様です』

その言葉は私の胸へ静かに沁みわたった。
 東日本大震災の発生翌日から、遠隔地の警察官な
 がら宮城県石巻市へ派遣された私にとって、東北
 弁独特の言い回しで物哀しささえ残るその言葉
 は、その時の私が置かれた状況と相俟あひまつて、
 時に強く訴えるものがあった。

出発前、「一人でも多く被災者を助けるぞ！」
 と固く心に誓って現地入りした私の行く手にた
 ちふさがったのは、怪物のような瓦礫の山と何
 十、何百という老若男女のご遺体だった。パー
 ル一本で瓦礫と格闘しながら海岸や家屋の中で
 ご遺体を発見しては安置所に運び込む毎日を送
 ることになり、死因を特定する検死が終るのを

待って納棺し、線香と花を手向^{たむ}けて合掌する日が続いた。そして、必然的なことだが、ご遺体の数だけ遺族がおられた。

現地ではあまりのご遺体の多さに葬儀業者も手が回らず、遺族が高齢者の場合で運べない時には私達が車まで棺を運んだ。ドライアイスでの保存が効かなくなれば指定の場所に穴を掘り、仮埋葬して番号だけの墓標を立てるなど、初めて経験する任務となった。

派遣が終わり、元の職場に戻った時、その任務内容を聞いた同僚達は、「そんなことまで！何でそこまで！」と驚いた。上層部に至っては、「遺体に長く触れると感染症になるじゃないか！」という者までいた。連日のように安置所で号泣される遺族の悲鳴を耳にし、あの悲惨で哀しみの極致に居合わせなかった者が言う資格はない。しかし、私がどれほど言葉を尽してみてもその哀しみは伝わらなかった。

私達が現地で行なったことは任務ではない。人間としての使命感だったのだ、そして、そんな時に必ず遺族の口から聞かれた言葉が「お世話様です」という言葉だった。

普段、私達が耳にする「ご苦労様です」「お疲れ様です」という儀礼的なものではなく、冒頭に記したように東北派遣中は至る所でこの「お世話様です」を聞いた。この言葉を聞く度に私の胸は張り裂けそうな感覚が支配した。

きっと、最初に決意した「必ず被災者を助けろぞ！」という意気込みが現実の厳しさを前に挫折して諦観にも似た感情に移っていったからだろう。大津波や地震で犠牲になられた方や遺族から私達は「お世話様です」と言われる立場にあるのか、という忸怩^{じくび}たる思いがそこにはあった。だがその中で最も哀切極まる、私を支えてくれた「お世話様です」を言ってくれた人がいた。

あれは何体目に搬送したご遺体だっただろう。長い髪の若い女性だった。津波に襲われたその女性は、衣服のポケットにあった診察券から身元が判明し、遺族であるご主人と幼稚園児の娘さんが安置所で対面された。

号泣されるご主人の横でただ寄り添い、佇^{たたず}むことしかできない私だった。パパの傍らで、棺の中に横たわるママの顔を覗^{のぞ}き込むお嬢ちゃんは、しきりにママへ囁^{ささや}いた。

「ママ。ママ。起きて。帰ろう。ね？」
そう無邪気な声で囁いた。ママは今すぐに起きあがるのでは、と思うほど綺麗な顔をしていた。私にとって長い長いご遺体確認の時間が終わり、明日引き取りに来る二人を出口まで見送った時だった。

「お世話様です」と頭を下げられたパパと繋いでいた手を離し、お嬢ちゃんは気をつけの姿勢となって、「おまわりさん。お世話様です」。そう言ってペコリとお辞儀をしたのだ。

一瞬、その子の顔が家で待つ自分の娘の顔と重なった。突然、ぐっと迫ってきた涙をようやく堪^{こら}え、私はしゃがみ込んで、お嬢ちゃんの頭に手を置いて撫^なでてあげた。そうしなければ、私はきっと耐えられなかっただろう。

「えらいね。こちらこそ。お世話様です。」
泣き笑いの顔だったけれど何とか言えた。お嬢ちゃんは嬉しそうな顔をして私に向かってバイバイし、何度も振り返っては頭を下げられるパパと一緒に帰って行った。

東北への長い派遣を終えて元の生活に戻った今、仕事先から帰る途中に夜空を見上げることが多くなった。澄み切っていた星を見上げながら思う。あの子のママもあの星のどれかになって、あの子をずっと守り続けてほしい。そして最後にこう呟^{つぶや}く。「お世話様です」。

戦後に対比される災後という言葉までが生まれた東日本大震災。我が国未曾有^{みぞう}の困難に際し、被災地で多くの犠牲者の死と残された遺族の生を間近で見、歯を食いしばりながら野辺^{のべ}の送りに寄り添った。そして固く誓った。この事実を語り継ぐことを。それがせめてもの手向^{たむ}けになるのだと信じて。

「お世話様です」。私を支え、魂を揺さぶった言葉です。